読売 俳壇

矢島渚男 選

松手入れときをり弟子のフランス語　志木市　谷村　康志

【評】明快で面白い。松の木の手入れは難しい仕事だが、弟子がフランス人で時折師匠に質問しながらやっている。こういう国際化は本物だろう。剪定は日本文化の優れた一つ。

木犀の香のうす湿り始まりぬ　大月市　米山　明博

【評】木犀の香りにふさわしいのはやはり乾いた空気、雨がくるのか、香りが湿ってきたという繊細さがいい。

高原の端に荷を解く茸売　富山市　藤瀬　晴夫

【評】初めは自分で採ったばかりの荷かなと思ったが、荷の茸だから、どうやら、下山客相手に茸を売っているらしい。この句は「高原の端に」が巧い。その道端でのこと。

言ひかけて止めし顔なり菊人形　川崎市　折戸　洋

木犀の香り豊かに歓喜天　久喜市　利根川輝紀

余生とは思い出探し秋澄む日　ふじみ野市　椎名　啓之

数珠玉に幼き記憶妻語る　田川市　原田祥二郎

お囃子はテープ神輿は軽トラに　宝塚市　広田　祝世

雛壇をまねて林檎を置く子かな　宇都宮市　松広　訓

この冬はせめて暖冬能登にあれ　福山市　平井　和子

高野ムツオ 選

捕へても臀呟のままのとんぼかな　稲城市　山口　佳紀

【評】捕まえた瞬間は、うまくいったとほくそ笑む。しかし、網の中でも交尾のままの蜻蛉の姿を見ると、しだいに罪悪感にとらわれ出す。切れ字が実に効果的だ。

団栗の転がつてゐる余生かな　奈良市　熊崎　彰

【評】陽のあたる斜面に見つけた団栗。つやつやとして、どれも静かな充実感に満ちている、そのさまに、余生はこうありたいとふと思った。

走り根の大地を摑む神の留守　川口市　清正　風葉

【評】松の走り根が、地面を縦横に走っている。神が出雲に帰ったことと何の関わりもないが、なぜか生命の逞しさを感じさせる。

千里来て鶴一本の足に立つ　東京都　天地わたる

烏瓜引く青空を引きにけり　香川県　福家　市子

茸飯五言絶句の襖背に　東京都　奥村　和子

土壁に濁流の跡冬籠　福島市　引地こうじ

俤はいつどこにでも草の花　茨木市　木川　志佳

転がつて笑ふ子どもら稲雀　西宮市　平田　あい

天高し見る触れるものみな句材　東京都　神通芙美代

正木ゆう子 選

遊ぶ子にどんぐり落とす大きな木　羽生市　岡村　実

【評】木から落ちた団栗で子供が遊ぶ、という文脈でないのが面白い。何かで遊んでいる子供に、大きな木が団栗を落とすのである。この木は遊びに参加したいのだ。童話のよう。

どんぐりをノギスで測る授業かな　松江市　三方　元

【評】子供が集めた団栗をサイズや形で分類するのか。ノギスという測定器名が言葉として生きているし、ノギスに挟まれた団栗まで見えそう。

秋草は吾がお太鼓に集まれり　東京都　山本　由美

【評】今日の帯は、さまざまな秋草を描いたお太鼓結び。秋草自ら集ってきたような、あるいは、あれもこれも美しと、摘み集めてきたような。

四時間の映画の忘我秋惜しむ　東京都　森　一平

秋風やボルダリングは背を捩る　上尾市　中野　博夫

稲に雀団栗に熊柿に猿　津　市　中山　道春

この辺り天狗の遊ぶ紅葉山　青梅市　松野　英昌

しばらくは幹うつ啄木鳥の時間　対馬市　神宮　斉之

たちまちに狭まる部屋や冬支度　東京都　杉中　元敏

羊水のしづかに満つる星月夜　神戸市　山口　誠

小澤實 選

零余子とり罠にかかりし鹿よそに　大阪府　池田　寿夫

【評】罠にかかった鹿がいることを確認してはいるが、まずは零余子とりから済ませようとしているわけだ。鹿は生きて苦しんでいる、そう思いつつも、この判断を選ぶのだ。

プチプチと音新米の炊きあがる　松山市　久保　栞

【評】新米ならではの炊きあがりの音を聞き取っている。「プチプチ」という音からも、新米の輝きと粘りとを感じとることができる。

爽やかやてきぱきこなすレジ係　旭　市　高野寿美子

【評】スーパーマーケットのてきぱきレジを打っている係の人の仕事ぶりに秋という季節の爽やかさを感じている。見ていて心地よいのだ。

焼きたての秋刀魚にジュッと醤油かな　武蔵野市　相坂　康

晩鐘に合掌したり稲架解きて　川越市　益子さとし

柿たわわ昇さんほどは食べられず　松山市　高山　洋子

海鼠から海鼠剝すや朝の市　北本市　萩原　行博

柿を剝く刃より左手うきうきと　福島市　横山ひろこ

朽ちてなほ合掌の屋根秋の空　西東京市　永井　康信

軽トラで妻と畑へ秋日和　佐野市　桑原　博

枝しおり 折

福永法弘句集『永』「天為」選者の第4句集。師・有馬朗人をしのぶ句などを収めた。△木の葉髪遺言めくもの何もなし▽（KADOKAWA、2970円）

宇井十間著『俳句以後の世界』名句を引用しながら、現代俳句の持つ身体性などについて触れる。前衛俳句とは何かを問い直す1冊。（ふらんす堂、2750円）

須田覚歌集『デカンの風がやむとき』インドに赴任し、コロナ禍を経験した歌人の第2歌集。異国での忘れがたい体験が繊細な言葉で迫ってくる。△目に見えぬものに追われて夕暮れの西ベンガルに息をひそめる▽（書肆侃侃房、2310円）

尾崎まゆみ編『塚本邦雄歌集』戦後短歌を先導した歌人の1800首余りを収録。解説と詳細な年譜が付く。△日本脱出したし　皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも▽（書肆侃侃房、2860円）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭